

最近の若者のしゃべり方

芸術学系 鈴木雅和

大学の紀要の読者は平均して1.5人だと、ある本に書いてあった。1人は著者その人であり、0.5人は印刷屋さんだそうである。印刷屋さんは、字は読んでも内容は読まないのだから0.5人らしい。特に書名を証すほどの品の良い本ではないが、だいたい当たっていると思う。その証拠に、昨年私が芸術学系の紀要の編集長を仰せつかった際も、中の論文は全く読まなかった。ということで、もし今これを読んでいる人がいたら、2.5人目の読者である。

新人は、紹介記事を書くことになっているらしいので、最近気になったことを書くことにする。私は大学を卒業後、住宅公団に14年ほど勤めた後、東大の付属農場に3年いて、筑波大学にやってきた。そのせいで、学生と付き合いようになったのはごく最近で、非常に新鮮な気分である。ただ、最近の若い人の話し方には一種のパターンがあり、非常に耳につく。この前までは、〇〇は一、××でーというように、語尾を長くのばして甘えながら上げるというしゃべり方と、〇〇みたいな・・・というフレーズがはやってきたようである。もっとも、この手の子は少し足りないみたいな子が多く、本学ではあまり見かけない。むしろ最近では、比較的真面目なタイプの子に、自分の意見を述べる途中でちょっと難しい単語を使うときに、その単語の語尾を、自信なさそうに上げるしゃべりかたと、「〇〇ということがあるじゃないですか・・・。」というフレーズがやたらと多い。単語の語尾にアクセントを持っていくのは、「先生、この単語こういう使い方いいんですね？」と同意を求めているようである。ただ、それを明示的に聞くのではなく、途中で何もお咎めがなければ、「ああ、この使い方良かったんだ。」と、無意識に確認しながら話しているようである。どうやら、自分の弱点を知っているらしい。「〇〇ということがあるじゃないですか・・・。」というのも、相手の納得を誘い出しながら、反発を避けているようである。決して断定的に言わない。しかし、それらのしゃべりかたが、かえって語彙の不足と論理性の無さを強調する結果となっている。

何しろ、「我々わー！・・・であるー！」という学園紛争時代を経験した団塊の世代にとっては、なんとも頼りなく映るのである。高校生の時までに、読んでも分からないような本に取り組んだり、理不尽な理論をふっかけて相手を困らせたりといった経験は大切だと思うのだが、兄弟の減少とか受験技術の偏りが原因なのだろうか？もっともこれは、それほど重大な問題ではなく、単なる流行かもしれない。ひょっとしたら、20年前に、「最近の学生の、我々わー！という言い方は非常に気になる。」と誰かが書いているかも。